【論　文】

動詞としての現在分詞being*

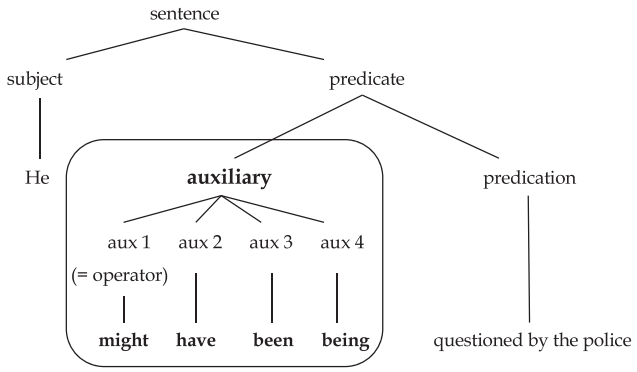
木　村　宣　美

0. はじめに

英語の節構造 (English sentence structure) において，次の (1a) に見られるように，複数の助動詞 (multiple auxiliaries) が生じることがあり，Quirk *et al*. (1972: 65) やQuirk *et al*. (1985: 121) によれば，その構造は，概ね，(1b) である。

(1) a. He might have been being questioned by the police.

b.



(1) に示されているように，英語の助動詞構造において，4 種類の助動詞 [auxiliary: AUX] (法助動詞 (modal auxiliaries)，完了 (perfective) のhave，進行 (progressive) のbe，受動 (passive) のbe)が生じることが可能で，この時の助動詞と動詞の語順は，概略，(2)である。

(2) a. Modal > perfect *have* > progressive *be* > passive *be* > lexical verb

b. $[_{TP}$ MOD $[_{VP}$ PERF $[_{VP}$ PROG $[_{VP}$ PASS $[_{VP}$ V ...]]]]]

(cf. Akmajian, Steele, and Wasow 1979, Fabb 1983, Burton-Roberts 2016)

* 本研究は，平成29年度–令和元年度日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（（基盤研究（C）研究課題『複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造と派生メカニズムの解明』（課題番号 17K02802））及び令和2年度–4年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（（基盤研究（C）研究課題『2 種類の助動詞倒置文の基底構造と派生メカニズムの解明』（課題番号 20K00656））に基づく研究成果の一部である。本稿では，論点をより明確にするために，著者が独自に，図形を加えたり，ボールド体で表記した箇所がある。

助動詞と動詞の語順は，(2) に示されているように，MODである法助動詞，PERFのhave，PROGのbe，PASSのbe，語彙的動詞の順で，固定されている。

Haveとbeの動詞句 (verb phrase: VP) 削除に関して，Sag (1976) やAkmajian, Steele, and Wasow (1979) は，(3) に基づき，動詞句削除に関する記述的一般化 (4) を指摘している。

(3) Betsy must have been being hassled by the police, and Peter {a.*must, b. must have, c. must have been, d.*must have been being,} too. (Sag 1976: 31)

(4) Non-finite *have* always stays overt, *being* is obligatorily elided, and *be* and *been* are optionally elided. (cf. Aelbrecht and Harwood 2015)

Haveとbeの動詞句削除に関する記述的一般化によれば，i) haveが削除されることはない，ii) beingは必ず削除されなければならない，[1] iii) beとbeenは随意的に削除される。木村 (2015a, 2015b, 2016a, 2016b, 2016c, 2016d, 2018) では，Williams (1984) やKaga (1985) の分析に従い，beには，2種類のbeがあり，助動詞のbeと動詞のbeに語彙的に区別されるという仮説に基づく動詞句削除分析を提案し，動詞句削除に関する記述的一般化は，i) 非定形 (non-finite) のbeingは動詞で，ii) 非定形のbeenが助動詞で，iii) 非定形のbeは動詞か助動詞かで曖昧であることから導かれると論じた。本稿の目的は，beの語彙的特性に基づく動詞句削除分析から得られた知見に基づき，(1b) とは異なる英語の助動詞構造を提案することにある。その際，屈折形態論 (inflectional morphology) の観点で，屈折接辞 (affix: *Af*) ingやenと併合される定形 (finite) 及び非定形のbeの範疇は，語幹 (stem) のbeの範疇により決定されるとする分析を提案する。

本稿の構成は，以下の通りである。第1節では，複合定形動詞句 (complex finite verb phrases) に対するQuirk *et al*. (1972, 1985) とChomsky (1957) を例に取り，4種類の助動詞がどのように扱われているか，概観する。第2節では，英語助動詞の構造に関する3つの分析 [i) 動詞としてのbeとhave，ii) 助動詞としてのbeとhave，iii) 機能範疇 (functional categories) の主要部としてのbeとhave] の構造と統語範疇の違いを概観する。第3節では，現在分詞beingの範疇に関する3つの分析 [i) 現在分詞beingは助動詞である，ii) 現在分詞beingは機能範疇の主要部である，iii) 現在分詞beingは動詞である] を概観する。第4節では，beは助動詞のbeと動詞のbeに語彙的に区別されるという仮説に基づき，屈折接辞ingやenと併合される語幹のbeの範疇（動詞あるいは助動詞）が，定形及び非定形のbeの範疇を決定するという分析を提案する。第5節では，素性 (features) 指定に基づき，beやhaveのラベルがVやAUXになるとする分析を提案するRadford (1988, 1997) を概観し，その問題点を指摘する。第6節は，結論である。

[1] Sag (1976: 32) は，動詞句削除において，beingは必ず削除されるので，beingを支配する節点AUXが刈り取られる (pruned) との分析を提案している。

1. 複合定形動詞句：Chomsky 1957, Quirk *et al*. 1972, 1985

1.1. Quirk *et al*. 1972, 1985

Quirk *et al*. (1972, 1985) では，動詞は助動詞と判助動詞 (semi-auxiliary verbs) のhave toやbe about to等と語彙的動詞に，助動詞は主助動詞 (primary auxiliary) と法助動詞に，主助動詞は周辺的 (periphrastic) doとhaveやbeに分類されている。

4 つの動詞タイプが様々な組み合わせ (various combinations) で生じる複合定形動詞句があり，Quirk *et al*. (1972: 73–74) やQuirk *et al*. (1985: 151–152) によれば，その 4 つの動詞タイプとは，以下の (5) のことである。

(5) a. Type A (法助動詞/周辺的助動詞)：法助動詞あるいは周辺的助動詞と動詞句の主要部の基体 (the base of the verb-phrase head) から成る：He *must examine*.
b. Type B (完了)：助動詞haveと動詞句の主要部のed過去分詞 (the *-ed* participle of the verb-phrase head) から成る：He *has examined*.
c. Type C (進行)：助動詞beと動詞句の主要部のing現在分詞 (the *-ing* participle of the verb-phrase head) から成る：He *is examining*.
d. Type D (受動)：助動詞beと動詞句の主要部のed過去分詞 (the *-ed* participle of the verb-phrase head) から成る：He *is examined*.

(5) の疑問文 (6) を考慮すると，mustやhasやis は 主語と助動詞の倒置 (subject-auxiliary inversion: SAI) の適用により，主語の左側に生じる。このような統語的な機能を担う助動詞を，Quirk *et al*. (1972: 65) やQuirk *et al*. (1985: 121) は，操作語 (operator) と呼んでいる。

(6) a. *Must* he examine?
b. *Has* he examined?
c. *Is* he examining?
d. *Is* he examined?

(6) の本来の位置に生じているexamineやexaminedやexamining は動詞句である。(cf. Radford 1988)

連辞 (copula) のbeやイギリス英語のhaveも，(7) で示されているように，周辺的な助動詞do (*do*-periphrasis) を伴うことなく倒置 (inversion) がなされるので，操作語であるとの分析が提案されている。英語には，主要部移動 (head movement) であるT (ense) to C (omplementizer) 移動により，動詞が時制 (T) から補文標識 (C) の位置まで移動することはないので，(7) のis やhasは，T to C 移動の適用を受けることができる助動詞である。

(7) a. *Is* she a pretty girl?

b. *Has* she any money? (British English) (Quirk *et al*.: 66)

1.2. Chomsky 1957

Chomsky (1957: 38) では，文法に動詞を分析する句構造規則 (phrase structure rules) が必要であり，単に Verb → take だけでは不十分であることが指摘されている。というのは，動詞語根 (verbal root) の take には，takes, will take, has been taken, is being taken のように多くの他の形態があるからである。このような動詞 take が取る様々な形態，すなわち，助動詞が関わる様々な形態を記述することができるように，(8–9) の句構造規則を加えることにより，強勢の置かれない (unstressed) 助動詞の生起を記述することができると Chomsky (1957: 38–39) は主張する。

(8) a. *Verb* → *AUX* + *V*

b. *V* → *hit, take, walk, read,* etc.

c. ***AUX* → *C(M)(have + en)(be + ing)(be + en)***

d. *M* → *will, can, may, shall, must*

(9) a. $C \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} S \text{ in the context } NP_{sing_} \\ \phi \text{ in the context } NP_{pl_} \\ past \end{array} \right\}$

b. Let *Af* stand for any of the affixes *past*, *S*, ϕ , *en*, *ing*. Let *v* stand for any *M* or *V*, or *have* or *be* (i.e., for any non-affix in the phrase Verb). Then:

Af + *v* → *v* + *Af* #, where # is interpreted as word boundary.

c. Replace + by # except in the context *v* – *Af*. Insert # initially and finally.

文の派生においては，現在 (present) あるいは過去 (past) の時制 (tense) を表わす (8c) の要素 C が必ず選ばれなければならない。次に，助動詞要素の選択はゼロでも良いし，定められた順番で括弧内の要素を複数選ぶこともできる。このように，(8–9) の規則に従い，takes, will take, has been taken, is being taken, has been being taken 等が導かれることになる。

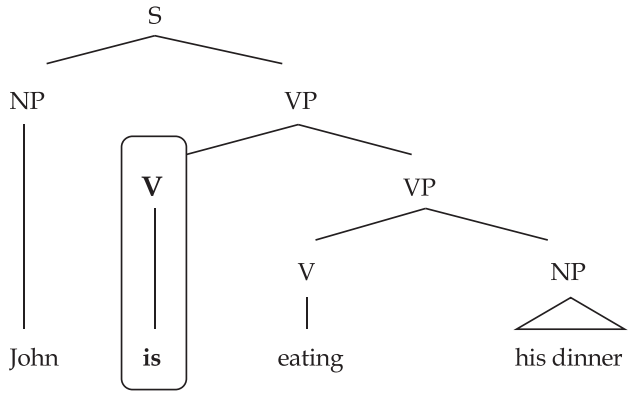
2. 英語助動詞の構造

2.1. 動詞としての be と have: Chomsky 1957, Quirk *et al*. 1972, 1985, Emonds 1976, Sag 1976, Pullum and Wilson 1977, Akmajian, Steele, and Wasow 1979, Bowers 1981, Gazdar, Pullum, and Sag 1982, McCawley 1988, Radford 1988, 1997, 2016, 2020, Culicover 2009, Bošković 2014, Burton-Roberts 2016, Aarts 2018, Fenn and Schwab 2018, Levine 2018, Kim and Michaelis 2020

英語助動詞の構造を動詞句として分析する立場がある。[2] この分析では，時制 (T) の位置に助動詞がない時，動詞のbeとhaveが主要部移動 (head movement) によりVの位置からTの位置に移動すると仮定されている。ここでは，進行形の文 (progressive-aspect sentences) に対するBowers (1981) の分析を概観することにする。

(10) a. John is eating his dinner.

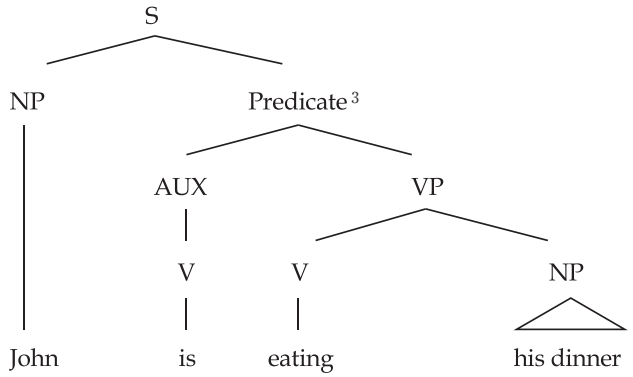
b.



(Bowers 1981: 121)

この構造 (10b) は，英語助動詞の構造を動詞句とする分析を反映した構造である。しかしながら，Chomsky (1957) の句構造規則 (8–9) やQuirk *et al*. (1972) の樹形図 (1b) を考慮すると，is の範疇はVではなくAUXのはずである。Chomsky (1957) の (8a) 及び Quirk *et al*. (1972) の動詞に助動詞が含まれるとする動詞分類に従えば，(10b) の is の表示は $[_{AUX}\ [_{Verb}\ \text{is}]]$ となる。もしそうであるとするならば，(10a) の構造は (10b) ではなく (11) でなければならない。

(11)



[2] この分析の中には，法助動詞をAUXあるいはTとし，それ以外をVPとする分析も含めている。

[3] ここでは，ラベルをPredicateとするが，SをTPと仮定すると，AUX（すなわち，T）とVPを支配する節点はT'となる。

この構造 (11) は，動詞句内にある be に be 転移 (*be*-shift) が適用され，節点 AUX に主要部移動することにより得られる構造であると考えられている。

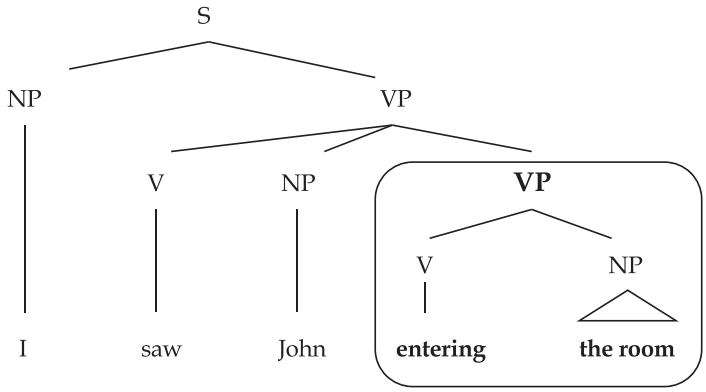
Bowers (1981) は，(12–13) のような知覚動詞補文(perception-verb complements) や受動態構文 (passive constructions) の派生に関して，文が基底 (an underlying sentence structure) となっているのではないと論じ，(12-13) の下線部の be を除いた過去分詞の動詞 + en や現在分詞の動詞 + ing は，動詞句補部(verb-phrase complements) の主要部を構成するとの分析を提案している。

(12) a. I saw the building demolished by the workmen.
b. I had a book stole from me by a thief. (Bowers 1981: 103)

(13) a. I saw John entering the room. (Bowers 1981: 107)
b. We had Bill stirring the soup for us. (Bowers 1981: 112)

(12a) と (13a) の下線部 demolished by the workmen と entering the room は知覚動詞補文の動詞句補部で，(12b) と (13b) の stole from me by a thief と stirring the soup for us は have 受動態構文の動詞句補部であり，現在分詞や過去分詞が主要部であるとの分析が提案されている。Bowers (1981: 120) は，この分析のもとで，(13a) の構造として，(14) を提案している。

(14)



(14) において，記号列 entering the room は，動詞 entering を主要部とする動詞句であるとする分析が，Bowers (1981) の分析の重要な論点である。現在分詞や過去分詞のような非定形動詞 (non-finite verb) を主要部とする動詞句が存在するという分析である。[4]

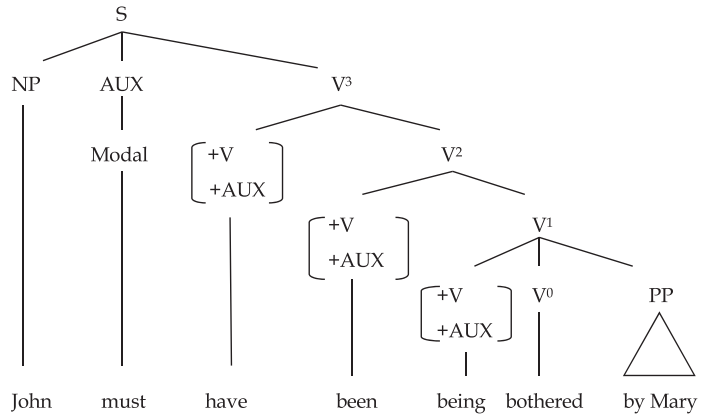
[4] 知覚動詞補文や have 受動態構文の補部として VP が生じるとする分析は，there 構文の内部構造 (Stowell 1978, Heggie 1988, 木村 2015b, 2016b) を検討するうえでの重要な指摘である。

2.2. 助動詞としてのbeとhave: Akmajian and Wasow 1975, 有元 1988, Edelstein 2020

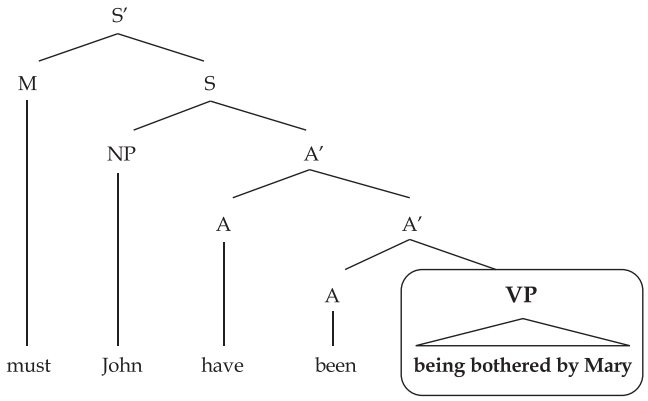
英語助動詞の構造において，すべてを動詞句として分析するのではなく，助動詞と動詞を異なる範疇として区別する分析がある。有元 (1988: 246) は，Akmajian, Steele, and Wasow (1979) が主張する構造 (15b) に対して，(16) を提案している。

(15) a. John must have been being bothered by Mary.[5]

b.



(16)



有元 (1988) は，MとA (spect) は範疇AUXのメンバーで，Mは「+AUX」[+M]，Aは [+AUX] [-M] の素性を持ち，VとAUXは異なる範疇であるとの「AUX説」の立場を取っている。受身の beは動詞であり，(16) に示されているように，VP内にあり，連辞のbe と受け身のbe は同一のbe であると主張されている。受身のbe の現在分詞beingは動詞句内の要素であるとの分析が提案されている。

5 Akmajian, Steele, and Wasow (1979) は，being を [+V, +AUX] と分析しているが，第4節で，beingは [+V, -AUX] であることを論じる。

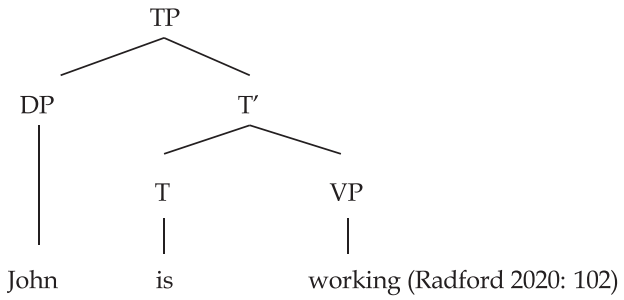
また，be転移を仮定し，進行のbeがない時は，本動詞のbeはAに移動し，[+AUX] [-M]という素性を持つことになるとの分析が提案されている。[6]

2.3. 機能範疇の主要部としてのbeとhave: Radford 1997, 2016, 2020, Bowers 2010, Harwood 2013, Aelbrecht and Harwood 2014, Van Gelderen 2017

英語助動詞の構造において，4種類の助動詞（法助動詞，完了のhave，進行 のbe，受動のbe）に対して，機能範疇の主要部のラベルを与えて表記する分析がある。例えば，Radford (2020) の表記を参考に，この分析を，概観することにする。助動詞が1つのみ含まれている時は，その助動詞はTに支配されている。[7] (17) は，進行形の文の構造である。

(17) a. John is working.

b.

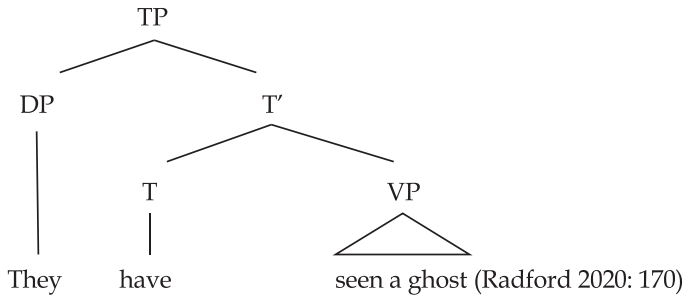


(Radford 2020: 102)

(18) は，完了形の文の構造で，(19) は，受動態の文の構造である。

(18) a. They have seen a ghost.

b.



(Radford 2020: 170)

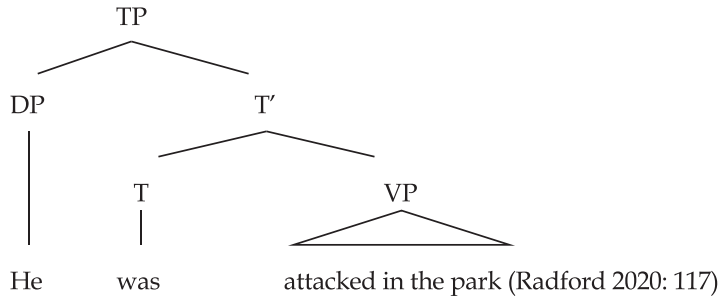
---

[6] 受身のbeは語彙的に動詞であるとする分析は本稿での分析と同じである。しかしながら，現在分詞beingの統語範疇が動詞となるのは，受身のbeだけではない。例えば，He is being careful. のような，形容詞句が後続する場合のbeingも同様に動詞である。詳細は，第4.3節を参照のこと。

[7] Radford (2020: 236–242) は，助動詞上昇 (auxiliary raising) に基づく分析を提案している。Tの時制接辞 (tense affix) が隣接する助動詞を引き付け，Tに付加させる操作である。

(19) a. He was attacked in the park.

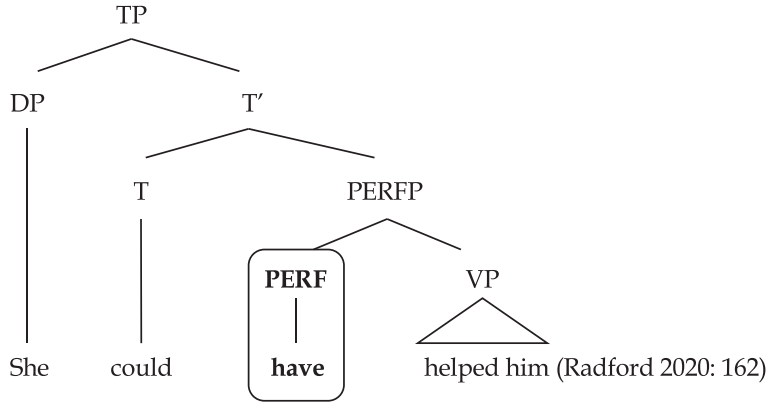
b.



複数の助動詞が生じる時，Perfective や Progressive や Voice のラベルが付与されることになる。

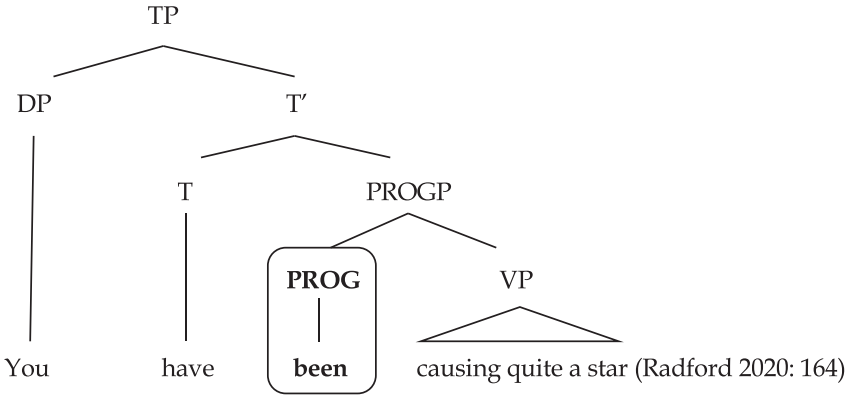
(20) a. She could have helped him.

b.



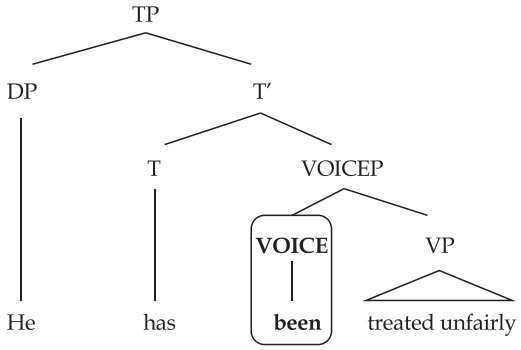
(21) a. You have been causing quite a star.

b.



(22) a. He has been treated unfairly. (cf. Radford 2020: 238)

b.



Radford (2020) によれば，(17–22) のT は時制を担う助動詞であり，(20) の PERFPや(21) の PROGP や(22)のVOICEP は助動詞句であり，AuxPということになる。[8]

2.4. 動詞としてのbeing：Fabb 1983, 有元 1988, Ramchand and Svenonius 2014, Samko 2014

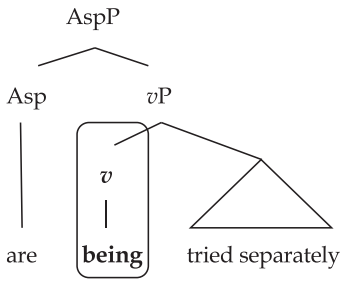
Samko (2014: 371–372) は，分詞前置 (participle preposing) の統語特性 (23) に基づき，Fabb (1983) や有元 (1988) と同様に，being は動詞であるとし，構造 (24) を提案している。

(23) a. Being tried separately from Koike are *Nomura and three former executives*.

b. *Tried separately from Koike are being *Nomura and three former executives*.

c. *Tried separately from Koike are *Nomura and three former executives* being.

(24)

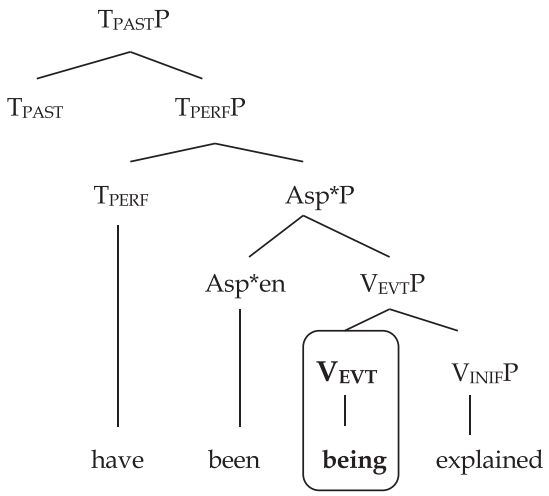


また，Ramchand and Svenonius (2014: 154) は，(25) に示されているように，being は $V_{EVT}P$ の主要部

[8] Perf や Prog や Voice は，相 (aspect) や態 (voice) を表わす機能範疇であり，統語範疇は動詞ではなく助動詞である。Harwood (2013) は，being は主要部 $Prog^0$ であると分析している。そうであるならば，第2.2節でみた「助動詞としての be と have」に分類されることになる。なお，現在分詞 being の統語範疇が何であるのかに関する言及は，Radford (2020) にはない。Being が機能範疇の主要部であるとするならば，動詞ではなく助動詞ということになる。

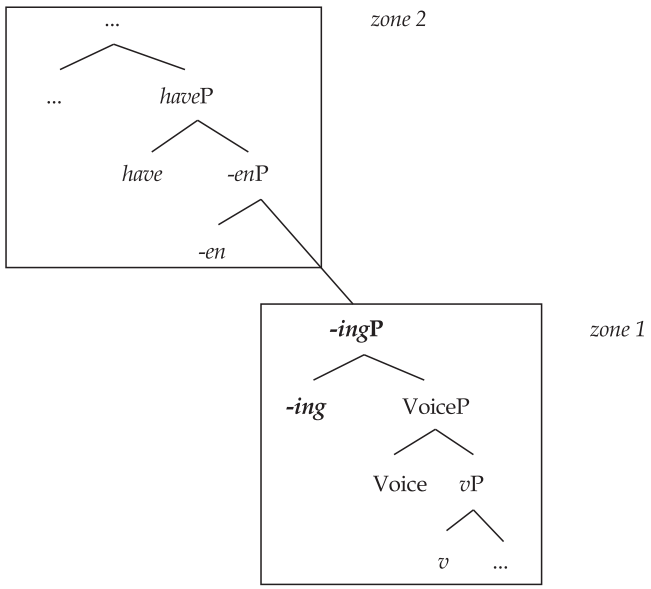
V_{EVT} であると分析し，時制や完了の助動詞とは異なる投射 (projection) を構成すると提案している。すなわち，being は，助動詞要素ではなく，動詞であるとする分析を提案している。[9]

(25)



Ramchand and Svenonius (2014: 158) は，(26) に示されているように，述部は 2 つの領域 (two domains) から成ると提案している。

(26)



[9] There 構文や動詞句前置や擬似分裂文や do 置換に基づく議論に関しては，Ramchand and Svenonius (2014: 156-157) や Ramchand (2018: 41–43) を参照のこと。

すなわち，(26) で示されているように，法助動詞や完了の助動詞が属する領域と進行や受動や主動詞が属する領域は異なっているとの分析が提案されている。Ramchand and Svenonius (2014: 158) によれば，2 つの領域の設定は，完了相と進行相における動詞の選択を反映している。すなわち，(27) で示されているように，進行相には状態動詞 (a stative verb) ではなく，動的な非状態動詞(a non-stative verb)のみが許される一方で，完了相はどのような動詞とであっても許容されるとする事実に基づいている。

(27) a. John is dancing the tango.
b. *John is knowing the answer.
c. John has known Sue for three years.

Prog は動詞が表わすイベント構造 (event structure) を選択することが求められるほどに，構造上低い位置にあることを示していると Ramchand and Svenonius (2014: 158) は論じている。

3. 動詞としての現在分詞being

3.1. 現在分詞beingは助動詞である

Quirk *et al*. (1972, 1985) は，(1b) から明らかなように，広い意味では動詞に分類されているが，助動詞であると仮定している。助動詞ではあるが，広い意味では動詞であるという分析は，Chomsky (1957), Emonds (1976), Sag (1976), Pullum and Wilson (1977), Akmajian, Steele, and Wasow (1979), Bowers (1981), Gazdar, Pullum, and Sag (1982), McCawley (1988), Radford (1988, 1997, 2016, 2020), Culicover (2009), Bošković (2014), Burton-Roberts (2016), Aarts (2018), Fenn and Schwab (2018), Levine (2018), Kim and Michaelis (2020) の分析にもあてはまる。Be や have を助動詞として分析している Edelstein (2020: 89) は，有元 (1988) とは異なり，現在分詞 being の範疇は助動詞であると分析している。ここで，英語助動詞と動詞の連鎖 (the auxiliary + main verb sequence) である modal + perfect + progressive + passive + main verb に対する Aarts (2018: 144) の分析を概観することにする。

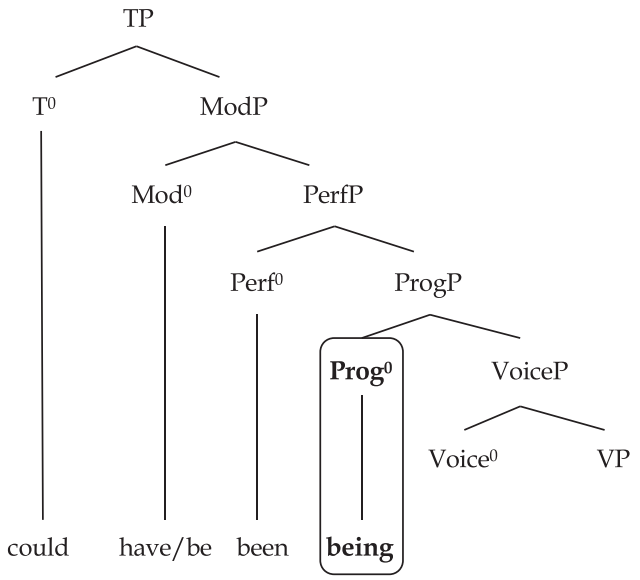
(28) Two essays must have been **[$_{\text{AUX}}$ being]** written by this student.

Aarts (2018: 144) は法助動詞＋完了の助動詞＋進行の助動詞＋受動の助動詞＋主動詞から成る記号列 (28) を提案し，そこで，being は助動詞であると分析されている。

3.2. 現在分詞beingは機能範疇の主要部である

英語助動詞と動詞の連鎖に対する Harwood (2013: 43) の分析を概観することにする。Harwood (2013: 43) が仮定する助動詞構造は，次の (29) である。

(29)



現在分詞 being はProgPの主要部Prog^0 であり，(29) の構造から明らかなように，being の範疇は助動詞である。[10] Beingを機能範疇の主要部とする分析は，beingの範疇は動詞ではなく助動詞であるとする分析と同じである。このことは，Radford (1997, 2016, 2020), Bowers (2010), Aelbrecht and Harwood (2014), Van Gelderen (2017)の分析にもあてはまる。

3.3. 現在分詞beingは動詞である

第 2 節での概観から明らかなように，Fabb (1983), 有元 (1988)，Ramchand and Svenonius (2014), Samko (2014), Ramchand (2018)が，現在分詞beingを動詞であると分析している。[11]

[10] この点に関しては，注8も参照のこと。

[11] 1) 動詞としての beの語彙的特性 (命令文・進行形が可能である；法助動詞 mustの解釈が非状態文なので根源的な意味になる) 及び 2)動詞としての beingの語彙的特性 (動詞句前置；知覚動詞補文と使役動詞 (causative verbs)補文における beingの分布；do so 置換) 等，現在分詞 beingは動詞であるとする仮説を仮定した2種類の beに基づく分析に関しては，木村 (2016b, 2016c, 2018) を参照のこと。非定形の beingと非定形の beや beenの統語上の特性の違いに関しては，Akmajian and Wasow (1975), Sag (1976), Akmajian, Steele, and Wasow (1979), Bowers (1981), Gazdar, Pullum, and Sag (1982), Radford (1988), Lobeck (1995), Roberts (1998), Hallman (2004), Harwood (2013), Aelbrecht and Harwood (2014), Ramchand and Svenonius (2014), Ramchand (2018)を参照のこと。Fabb (1983: 108–110) は，stem-*ing* は，beが先行する時，[+V, -AUX]という素性を持つ動詞として進行相を表わすと分析している。

4. 屈折と非定形beやbeenやbeingの範疇

4.1. 屈折接尾辞の機能

語形成において，屈折 (inflection) と派生 (derivation) には，大きな違いがある。すなわち，派生では，統語範疇が時に変更されることがあるのに対して，屈折では統語範疇が変更されることはない。この点を，(30–31) を例に取り，考えてみることにする。

(30) 派生

a. [Adverb [Adjective *beautiful*] + *ly*]

b. [Noun [Adjective *sick*] + *ness*]

(31) 屈折

a. He [Verb [Verb *walk*] + *s*]

b. some [Noun [Noun *book*] + *s*]

(30) に示されているように，派生では，接辞 (affix: *Af*) が付加されることにより，統語範疇が変更されることがある。形容詞beautifulに接辞lyを付加することにより副詞beautifullyが，形容詞sickに接辞nessを付加することにより名詞sicknessが導かれる。派生接辞が統語範疇を決定する主要部である。一方，屈折では，(31) で示されているように，動詞にϕ素性の 3 人称単数現在を表わす接辞sを付加しても動詞のままであり，名詞に複数の接辞sを付加しても名詞のままである。このように，屈折接辞は付加されても範疇を変えることはない。このことから導かれる一般化は，(32) である。

(32) a. 派生接辞が語根 (root) に付加される時，その範疇は派生接辞の範疇により決まる。

b. 屈折接辞が語幹 (stem) に付加されても，統語範疇が変わることはない。

図式化すると，次の (33) として，まとめることができる。(cf. Selkirk 1982)

(33) a. 派生　　b. 屈折

すなわち，一般化 (32b) によれば，屈折接辞は語幹に付加されても統語範疇を変えることはない。完了の過去分詞を導くenや進行の現在分詞を導くingや受動の過去分詞を導くenは屈折接辞であ

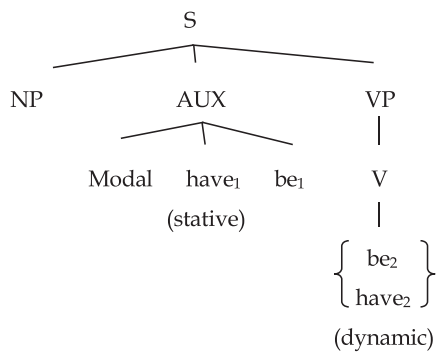
り，屈折接辞enやingが付加されたとしても，統語範疇が変わることはない。この観点で，beの範疇は何かと言う問題は，きわめて重要な問題である。

4.2. 2種類のbe: Williams 1984, Kaga 1985, Huddleston and Pullum 2002, 木村 2015a, 2015b, 2016a, 2016b, 2016c, 2016d, 2018

Kaga (1985)では，英語の助動詞システムにおいて，助動詞が独自の範疇として存在するという立場に立ち，beとhaveが静的 (stative) か動的 (dynamic) かに基づき，2つのクラスに分類される。(34b) の句構造に示されているように，静的なbeとhaveは助動詞であり，動的なbeとhaveは動詞であるとする分析が提案されている。[12]

(34) a. The stative *be* and *have* are generated as a member of AUX and the dynamic *be* and *have* as true verbs.

b.



(Kaga 1985: 276)

静的なbeとhaveは助動詞で，動的なbeとhaveは動詞であるとする分析により，主語・助動詞の倒置 (SAI)，動詞句削除 (verb phrase deletion)，命令文 (imperative sentences)，DO支え (*do*-support)，to-be削除 (*to-be* deletion) の定式化が簡略化され，従来の分析では十分に説明することのできない現象に適格な説明を与えることができることが示されている。さらに，Kaga (1985) では，Akmajian and Wasow (1975)，Akmajian, Steele, and Wasow (1979)，Bošković (2014)とは異なり，beやhaveが助動詞的な振る舞いをすることを説明するための操作である，範疇「動詞句」に支配されているbeやhaveが，範疇「助動詞」に移動する効果を持つ転移規則 (shifting rule) を仮定しない。[13] この転移規則によって，AUXに移動すると考えられてきたbeやhaveは，本稿においても，基底でAUXであると仮定し，助動詞構造に関する分析を提案する。本節では，定形及び非定形のbeの統語範疇が，屈折

[12] Kaga (1985: 278) によれば，助動詞のbeはprogressive *be*, stative copula *be*, stative passive *be*, existential *be*で，動詞のbeはdynamic copula *be*, dynamic passive *be*である。

[13] Be転移はbeの特性の違いに言及することなく，規則が定式化されていて，どういう時に移動し，どういう時に移動しないのか，原理だった説明がなされていないことが大きな問題である。

に関する一般化 (32b) と 2 種類の be を仮定することで，決定されるとする分析を提案する。すなわち，be の語彙的特性 (35) に基づく範疇の決定に関する分析を提案する。[14]

(35) Be には 2 種類あり，助動詞の be と動詞の be に語彙的に区別される。
(Williams 1984, Kaga 1985, 木村 2015a, 2015b, 2016a, 2016b, 2016c, 2016d, 2018)

4.3. 定形や非定形の be の統語範疇

語形成上の屈折接辞 (*Af*) に関する一般化 (32b) と be の語彙的特性 (35) を仮定することで，1) 非定形の場合，状態の be と been は助動詞で，非状態の be と being は動詞であり，2) 定形の場合，be は助動詞であると分析することができることを論じる。

まず最初に，定形の be の統語範疇がどのように決まるのかを示す。

(36) a. He **[AUX was]** a student.
b. He **[AUX was]** running in the park.
c. He **[AUX was]** arrested by the police.

(37) a. *Was* he a student?
b. *Was* he running in the park?
c. *Was* he arrested by the police?

定形の be である am, is, are, was, were は，be と時制 (T) 要素が併合されて導かれる統語上の対象物 (syntactic objects: SO) であり，十分に屈折した形で派生に導入される。(cf. Lasnik 1999, Aelbrecht and Harwood 2014) 節の主要部 T の位置に生じることから，定形の be は助動詞である。このことは，(37) で示されているように，主要部移動である主語と助動詞の倒置 (SAI) の適用を受けることから明らかである。このように，定形の be はいずれの場合も助動詞である。

次に，be の語彙的特性 (35) との関連で，法助動詞に後続する非定形の be の範疇が何であるか，考えることにする。

---

[14] Huddleston and Pullum (2002: 114) は，why 構文や if 条件節に生じる be は語彙的動詞 (a lexical verb) として振る舞うことを指摘している。

(i) a. Why <u>don't</u> you <u>be</u> more tolerant? b. Why <u>doesn't</u> he <u>be</u> more tolerant?
(ii) a. If you <u>don't be</u> quick you'll lose. b. If he <u>doesn't be</u> quick he'll lose.

(i-ii) から明らかなように，do 挿入がなされるからである。

(38) a. He must **[AUX be]** tall.
b. He must **[V be]** careful.

(39) a. ***[AUX Be]** tall.
b. **[V Be]** careful.

(38a)のbeと(38b)のbeは，beの語彙的特性(35)に基づき，それぞれ，助動詞のbeと動詞のbeであり，区別されなければならない。というのは，(39)から明らかなように，(39a)では，命令文が成立しないので，beは助動詞であり，(39b)では，命令文が適格であるので，beは動詞であるからである。[15]

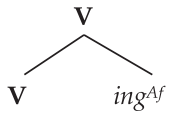
第三に，助動詞のbeに後続するbeの範疇が何であるか，beの語彙的特性(35)の観点で，考てみることにする。

(40) a.*He is **[AUX being]** tall.
b. He is **[V being]** careful.

(41) a.*He is **[AUX being going to]** play baseball.
b. He is **[V playing]** baseball.

(41)の文法性から，屈折接辞ingは動詞と併合することはあっても，助動詞と併合することはないことがわかる。このことから，(40b)で示されているように，動詞のbeは接辞ingと併合され，動詞beingが導かれる。助動詞のbeは，(40a)が示しているように，接辞ingと併合されることはない。屈折接辞ingの併合のパターンを図式化すると，(42)となる。

(42) **屈折接辞ingの併合のパターン**：



屈折接辞ingは動詞と併合して動詞を導く屈折接辞であり，助動詞と併合することがない屈折接辞である。

最後に，完了のhave に後続するbeと屈折接辞enが併合した非定形のbeenの範疇が何であるか，

[15] 2種類のbeを仮定することにより，助動詞mustの意味解釈の違いに説明を与えることができることに関しては，木村 (2015a, 2016a, 2016d) を参照のこと。

考えてみることにする。[16]

(43) He [$_{T}$ has] **[$_{AUX}$ been]** [$_{AP}$ careful].

(44) a. He **[$_{T}$ is]** [$_{AP}$ careful].
b. He [$_{T}$ has] **[$_{AUX}$ been]** [$_{VP}$ being careful].

非定形のbeenは，屈折接辞の一般化 (32b) とbeの語彙的特性 (35) に基づくと，[$_{AUX}$[$_{AUX}$ *be*] *en*^{Af}] という構造を持ち，助動詞である。これが，完了のhaveに後続するbeenの範疇である。

5. 素性指定に基づく範疇の分析：Radford 1988, 1997

Radford (1988: 149–155) では，動詞である助動詞は法助動詞 (modal auxiliaries) と非法助動詞 (non-modal auxiliaries) に分類され，区別されるべき特性を有することから，素性指定に基づく分析が提案されている。動詞に対して与えられる素性の組合せ (feature-complexes) は，以下の通りである。

(45) a. verbs = [+V, -N]
b. auxiliary verbs = [+V, -N, +AUX]
c. nonauxiliary verbs = [+V, -N, -AUX]
d. modal auxiliary verbs = [+V, -N, +AUX, +M]
e. Non-modal auxiliary verbs = [+V, -N, +AUV, -M] (Radford 1988: 155)

Radford (1988) の (45) の分類に基づくと，beとhaveは (45e) に分類される。すなわち，素性 [+V, -N] を有することから動詞であり，また，素性 [+V, -N, +AUX] を有することから助動詞であると特徴づけられている。[17] しかしながら，本稿の議論が正しいとするならば，beやhaveが，(45e) の指定がされているので，動詞であったり，助動詞であったりするのであるという事にはなってはいない。Beには動詞のbeと助動詞のbeがあり，屈折接辞が付加されることにより，語形変化がなされ

[16] 動詞のbeは，次の (i) で示されているように，命令文の形式で通常用いられる。

(i) a. Why don't you be quiet?
b. Will you be quiet? (Kaga 1985: 276)
c. Do be quiet! d. Don't be silly! (Quirk *et al*. 1972: 81; cf. Kaga 1985)

なお，Huddleston and Pullum (2002) の指摘，すなわち，注14も参照のこと。

[17] Radford (1997: 66–68) は，動詞が機能範疇であるのかそうではないのかに基づき，助動詞は素性 [+V, -N, +F] を持つと分析されている。素性 [+F, +PERF] を持つことで，完了のhaveにVあるいはAUXあるいはPERFというラベルが付与され，素性 [+F, +PROG] を持つことで，進行のbeにVあるいはAUXあるいはPROGというラベルが付与されることになるとの分析が提案されている。

るが，語幹の範疇により範疇が決定されているのである。

6. 結論

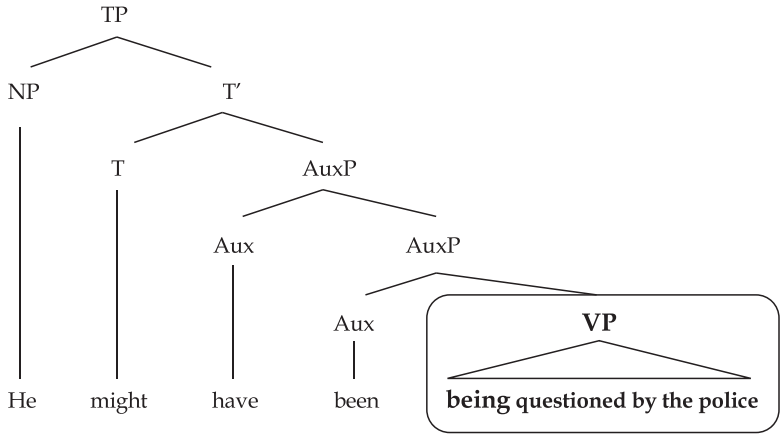
英語の助動詞構造において，複数の助動詞，すなわち，4 種類の助動詞 (法助動詞，完了の have，進行の be，受動の be) が生じることがある。本稿では，4 種類の助動詞のうち，特に，being の範疇が助動詞であるのか，それとも動詞であるのか，考察し，屈折接辞の一般化 (32b) と be の語彙的特性 (35) から，結論として，以下を導き出した。

(46) Being の範疇は動詞である。

この結論を踏まえると，従来の助動詞構造に関して，being は助動詞であると見なされていた構造，例えば，Quirk *et al*. (1972, 1985) が仮定した構造 (1b) は，(47b) として改訂されなければならない。

(47) a. (= (1a)) He might have been being questioned by the police.

b.



すなわち，英語の助動詞構造において，法助動詞 (T あるいは M) と PERF の have と PROG の been は助動詞であり，being は動詞であるとして分析されなければならない。本稿の分析の帰結として，語彙的な特性として，have と been が助動詞で，being が動詞であることから，助動詞上昇 (auxiliary raising) の操作が適用されなければならない現象（たとえば，否定文）に厳格な制限を課すことが可能になるということができる。本稿では，been や being の範疇の決定は，1) be は助動詞の be と動詞の be に語彙的に区別される，2) 屈折接辞 ing や en と併合される語幹の be の範疇 (動詞あるいは助動詞) が定形及び非定形の be の範疇を決定するという，2 つの仮説から導き出すことができることを論じた。

参考文献

Aarts, Bas. 2018. *English Syntax and Argumentation. Fifth Edition*. London: Palgrave.

Aelbrecht, Lobke, and William Harwood. 2014. To be or not to be elided: VP Ellipsis Revisited. *Lingua* 153 (2015) 66–97.

Akmajian, Adrian, Susan Steele, and Thomas Wasow. 1979. The Category AUX in Universal Grammar. *Linguistic Inquiry* 10:1, 1–64.

Akmajian, Adrian, and Thomas Wasow. 1975. The Constituent Structure of VP and AUX and the Position of the Verb *Be*. *Linguistic Analysis* 1:3, 205–245.

有元將剛 1988.「英語助動詞の構造」『英文学研究』第64巻第2号 245–263.

Bošković, Željko. 2014. Now I'm a Phase, Now I'm Not a Phase: On the Variability of Phases with Extraction and Ellipsis. *Linguistic Inquiry* 45:1, 27–89.

Bowers, John S. 1981. *The Theory of Grammatical Relations*. Ithaca: Cornell University Press.

Bowers, John S. 2010. *Arguments as Relations*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Burton-Roberts, Noel. 2016. *Analysing Sentences: An Introduction to English Syntax*. London: Routledge.

Chomsky, Noam. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.

Culicover, Peter W. 2009. *Natural Language Syntax*. Oxford: Oxford University Press.

Dikken, Marcel den. 2006. *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*. Cambridge, MA: MIT Press.

Edelstein, Elspeth. 2020. *English Syntax: A Minimalist Account of Structure and Variation*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Emonds, Joseph E. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*. New York: Academic Press.

Fabb, Nigel. 1983. Three Squibs on Auxiliaries. *Papers in Grammatical Theory* (MIT Working Papers in Linguistics 5), 104–120.

Fenn, Peter, and Gotz Schwab. 2018. *Introducing English Syntax: A Basic Guide for Students of English*. New York: Routledge

Gazdar, Gerald, Pullum, Geoffrey K., and Ivan A. Sag. 1982. Auxiliaries and Related Phenomena in a Restrictive Theory of Grammar. *Language* 58:3, 591–638.

Hallman, Peter. 2004. Constituency and Agency in VP. *Proceedings of the 34 st West Coast Conference on Formal Linguistics*, 304–317.

Harwood, William. 2013. *Being Progressive is Just a Phase: Dividing the Functional Hierarchy*. Doctoral Dissertation, Ghent University.

Heggie, Lorie A. 1988. *The Syntax of Copular Structures*. Doctoral dissertation, University of Southern California.

Huddleston, Rodney, and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kaga, Nobuhiro. 1985. The Syntax of *Be* and *Have*: AUX or Main Verb『英文学研究』第62巻第2号 275–292.

Kim, Jong-Bok, and Michaelis, Laura A. 2020. *Syntactic Constructions in English*. Cambridge: Cambridge University Press.

木村宣美 2015a.「述語削除と法助動詞の陳述緩和的・根源的意味」『英語語法文法学会第23回大会予稿集』40–47.

木村宣美 2015b.「2種類の助動詞倒置」日本中部言語学会第62回定例研究会配布資料（静岡県立大学）

木村宣美 2016a.「述語削除と法助動詞mustの意味」『人文社会論叢（人文科学篇）』 第35号，弘前大学人文学部，1–19.

木村宣美 2016b.「動詞句削除：2種類のbeに基づく分析」『日本言語学会第152回大会予稿集』186–191.
木村宣美 2016c.「連結詞beの語彙的特性に基づく動詞句削除分析」日本中部言語学会第63回定例研究会配布資料（静岡県立大学）
木村宣美 2016d.「述語句削除と法助動詞mustの陳述緩和的・根源的意味」Ars Linguistica (Linguistic Studies of Shizuoka) vol. 23, 53–70.
木村宣美 2018.「BEの語彙的特性に基づく動詞句削除分析」Ars Linguistica (Linguistic Studies of Shizuoka) vol. 25, 34–53.
Lasnik, Howard. 1999. *Minimalist Analysis*. Oxford: Blackwell Publishers.
Levine, Robert D. 2017. *Syntactic Analysis: An HPSG-Based Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
Lobeck, Anne. 1995. *Ellipsis: Functional Heads, Licensing, and Identification*. New York: Oxford University Press.
McCawley, James D. 1988. *The Syntactic Phenomena of English Volume 1*. Chicago: The University of Chicago Press.
Pullum, Geoffrey, and Deirdre Wilson. 1977. Autonomous Syntax and the Analysis of Auxiliaries. *Language* 53:4, 741–788.
Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
Radford, Andrew. 1988. *Transformational Grammar: A First Course*. Cambridge: Cambridge University Press.
Radford, Andrew. 1997. *Syntactic Theory and the Structure of English: A Minimalist Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
Radford, Andrew. 2016. *Analysing English Sentences*. *Second Edition*. Cambridge: Cambridge University Press.
Radford, Andrew. 2020. *An Introduction to English Sentence Structure*. *Second Edition*. Cambridge: Cambridge University Press.
Ramchand, Gillian Catriona. 2018. *Situations and Syntactic Structures: Rethinking Auxiliaries and Order in English*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
Ramchand, Gillian, and Svenonius, Peter. 2014. Deriving the Functional Hierarchy. *Language Sciences* 46, 152–174.
Roberts, Ian. 1998. *Have/Be* Raising, Move F, and Procrastinate. *Linguistic Inquiry* 29:1, 113–125.
Sag, Ivan A. 1976. *Deletion and Logical Form*. Doctoral dissertation, MIT.
Samko, Bern. 2014. A Feature-Driven Movement Analysis of English Participle Preposing. *Proceedings of the 31st West Coast Conference on Formal Linguistics*, 371–380.
Selkirk, Elisabeth O. 1982. *The Syntax of Words*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
Stowell, Tim. 1978. What Was There Before There Was There. *Papers from the Fourteenth Regional Meeting Chicago Linguistic Society,* 458–471.
Van Gelderen, Elly. 2017. *Syntax: An Introduction to Minimalism*. Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
Williams, Edwin. 1984. *There*-Insertion. *Linguistic Inquiry* 15:1, 131–153.